特選

ほほえみを見届けるまでここにいる

犬上郡豊郷町　須田さゆり

（評）看病であろうか、介護であろうか、見守る人の情に厚い、温かい、そして、こまやかな心遣いを思う。見守られる人の苦痛も和らぐであろう。

（十九郎）

特選

上手いこと転がっているここにいる

東近江市　河﨑章

（評）「上手いこと」は、要領よくという意味ではなく、周囲の人に恵まれたことへの感謝や自らの努力を認めた言葉であろう。湿り気がなく、「私の現在地」を肯定した明るさがある。

（裕見子）

特選

青空にためらいのない笛となる

犬上郡甲良町　川口利江

（評）トンビの鳴き声からの発想かもしれないがのびのびと高い音色でヒュ～となっている笛の音が聞こえそう。青空を見て何の陰りもない作者の心境だろうか。大きくて爽やかな句である。

（恒雄）

入選

終活の話もすこし女正月

長浜市　勝木岩松

（評）女正月（おんな）とは一月十五日のこと。年始に多忙だった女性が、この日に年賀に出向くことから言う、と広辞苑にある。ここでは、高齢者たちの会話が弾んでいるが、終活のことなど考えたくもないという思いが、「すこし」に表れている。

（十九郎）

入選

拭き終えて亡夫の匂いのする柱

鳥居本町　寺村美恵

（評）一家の主としてよく働いてくれた人を思っている。故人の性格などを示す言葉はないが、それを想像することができる。表記として、不用意に「亡」を使うことは勧めないのだが、この句の場合はそれも必然であったと思う。

（裕見子）

入選

青空をまるごと抱いて飢えている

外町　筑田豊子

（評）何の曇りもない青空は全部抱えても空っぽだ。あまりの明るさは何も満たしてくれない。虚しさが増すばかりの青を抱いているのだ。空虚、空白。空は確かに空しい。青空と餓えがこんなに近いことを知った。

（恒雄）

入選

目標はあなたのような笑顔です

愛知郡愛荘町　青木郁子

（評）「あなた」は、夫、妻、恋人、特に親しい知人などのいずれかであろう。「あなた」に会う度に心が温まり、いつの間にか笑顔になっている。そして、笑顔は周りに広がってゆく。

（十九郎）

入選

百合の香をこぼさぬように包み込む

古沢町　野洲令子

（評）「百合の香」はユリの花そのものであり、またその場のすがすがしい雰囲気や居合わせた人との会話の余韻であるように感じる。持ち帰った人を何度も豊かな気持ちにさせる「香」であろう。

（裕見子）

入選

ねこ通るもういいでしょう釘抜いて

新海浜二丁目　森口ますこ

（評）打ち付けた釘が壁板を貫いて何本も裏側に出ている。はじめは嫌がっていた猫が通り抜けるようになった。もういいでしょう、いつまでも尖がっていなくても。猫の柔らかな背中が慰めてくれている。

（恒雄）

佳作　**三月の御空ちちははは棄てなさい**

地蔵町　大谷のり子

佳作　**さくら咲く頃に会いたい人ひとり**

西沼波町　外海芳子

佳作　**老人車押してる友とウオーキング**

日夏町　寺村保子

佳作　**核のない国にあふれる汚染水**

正法寺町　髙井豊

佳作　**ジャリジャリと掃除機の音母の部屋**

清崎町　西村孝子

佳作　**花植える妻の背中に乙女見る**

清崎町　辻哲雄

佳作　**耳遠く話す人なく経を読む**

鳥居本町　北川夏子

佳作　**かなづちもいつかはきっと浮かびます**

大津市　的場功巳

佳作　補聴器はもういらないと二人きり
稲里町　覇流　不良者

佳作　菜の花と仲良しになるランドセル
堀町　河分　武士

佳作　お互いにケンカしながら笑おうね
八坂町　山本　はるか

佳作　ありがたい昨日と同じ今日が来た
大藪町　大塚　しのぶ

佳作　大騒ぎ見つけた後も探すふり
辻堂町　小林　信子

佳作　春の使者もも色ペンキ下げてくる
大藪町　加藤　佑子

佳作　共白髪不協和音も良き調べ
東近江市　小林　清次郎

佳作　青い空心の揺れを受けとめる
竹ヶ鼻町　小椋　きぬ子

佳作　山積みを崩したいのに咲くぼたん
犬上郡多賀町　清水　容子

佳作　ごつい手で背をもんでくれ癒やされる
宇尾町　門野　操

佳作　ごめんなさい言い足りなくて昼の月
平田町　竹内　歌子

佳作　しっかりと生きたい足の固さかな
松原町　川村　美栄子

佳作　書くことで苦しみノートが吸ってゆく
須越町　島田　洋子

《総評》

私は、川柳を創作するときに、次のことを常に念頭に置いている。

自分の思いを
言葉で
川柳にして
相手に伝える。

短詩形文芸としての川柳は、作者の思い、訴え、その他の情報を読者に伝える方法の一つである。情報を発信する側の作者から情報を受信する側の読者へ、的確に情報を伝えるために、作者は、五・七・五音のリズム、言葉選び、言葉の組み立て、漢字の使い分けなどの他に、具象的または心象的表現、あるいは、比喩を用いた表現などによって、言葉を有効適切に用いなければならない。

川柳を理解するために必要なこととして、私は、次のことを勧めている。

・できるだけ多くの川柳を読む。
・できるだけ多くの川柳を作る。
・できるだけ多くの川柳を投句する。
・川柳を批判してもらう―ひとりよがりを避ける。
・川柳に関することを読んだり聞いたりする―川柳についての知識を深める。
・川柳を考える―自分の川柳を目指す。

（「市民文芸作品入選集」平成二十年度の川柳総評を一部変更した）

青木　十九郎

今年は昨年よりも投句数が増え、いい句も増えて楽しく選をさせていただきました。

私の選んだ4句目以降にも佳句は多くありました。

「三月の御空ちちはは棄てなさい」は彦根市民文芸では初めて見るような衝撃です。父母を棄て故郷彦根を捨て飛びだして行くんだと、涙を押し殺して子に諭しているのでしょう。

子離れ親離れの心情が伝わってきます。今これを書きながら、入選に採るべきであったかと反省しています。

「核のない国にあふれる汚染水」は時事吟でこれも市民文芸に珍しい句です。反原発の句ですが、市民の中には原発推進派の方もおられます。私は自らの意見を自らの言葉で表された句が佳いものであれば、その句の内容に関わりなく、入賞作品として取り上げたいと思っています。時事吟ではマスコミの意見や言葉に流されないようにしてください。逆に彦根市民文芸から日本中に広がる名言名句が出ればと思っています。

では来年に向けよろしくお願い致します。

重森　恒雄

今年も皆さんが寄せてくださった川柳作品と向き合いました。

体験に基づく実感を書かれた句が多いのは例年のことで、真実の想いを感じる川柳が多くありました。

作品を書くには五感を総動員して、その素材を発見する必要があります。しかし、歳月と共に誰でも足腰が弱り、目や耳も衰えます。作品を産むための情報が集めにくくなるのは当然だと思います。

それでも、私たちには想像力という「力」があります。その力を使えば、頭の中に森や川を出現させることも二十歳になることもできます。年齢を重ねて作品を書き続けている人の多くが、体験による実感と共に、想像力を使って作品を書いておられるように思います。また、さまざまな事象への「アンテナ」が鋭敏で自由な精神を持つ人も、日常の中から川柳の種を見つけるのが上手です。

美しくまとまった句を書く必要はありません。

来年もまた応募してくださることを願っています。

峯　裕見子

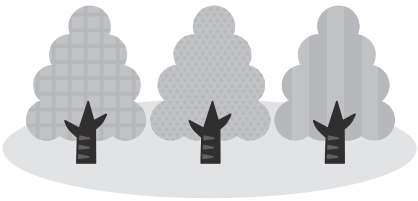
選者吟

新緑の古城に立って我が轍

青木十九郎

王手飛車ですか痒くはないですか

重森　恒雄

発光体になって歌っているアリア

峯　裕見子